

《盗作》の文学史

市場・メディア・著作権

栗原 裕一郎 著

(新曜社・3990円)



くりはら・ゆういちろう

1965年生まれ。ライター。共著に『腐っても「文学」!?』『禁煙ファシズムと戦う』など。

世に「盗作」と呼ばれる現象は尽きないが、その定義は曖昧である。しかも、著者が言う「ポストモダンな批評」の登場は、盗作概念を更に曖昧化することになった(と思える)。引用や作品の歴史的重層を方法化する「間テクスト性」(クリステヴァ)等の概念がそれである。卑俗に解された場合、それらの概念は、文学作品の「オリジナリティー」を破壊する。著者は、そうした概念を括弧に入れることで、現代にいたるまでの、日本文学における盗作の細かい歴史を書き得た。し

かしそのことは逆に言えば、「ポストモダンな批評」による盗作概念の曖昧化が、著者に価値判断を可能にさせているというのであつて、逆説的ながら、本書もまた「ポストモダン的な」書物ということができる。この逆説のなかで成立したところに本書の今日性がある。本書は近代以降の日本文学の盗作史を概観した後、倉橋由美子の『暗い旅』における二人称の語りが、ヌーヴォー・ロマンの作家ビュトルのパクリではないかと問われ

曖昧化する概念を客観的に

た論争に始まり、有名無名の盗作問題を詳細に追う。近年の数多くの盗作問題にも触れている。また、盗作問題が「著作権問題」として裁判で争われる傾向を見せ、同時にそれがネット社会という現状の問題でもあるということを指摘して、示唆に富んでいる。

本書の記述は客観性を旨としているが、私見では、あえて倫理的に糾弾されなければならぬ盗作はあり、そうであるにもかかわらず曖昧に不問に付されるケースも多々ある(もちろん、逆の事態も存在する)。それは、多くの場合、出版・ジャーナリズム資本の「意志」が働いているからである。盗作問題が近代的な現象だとすれば、それは、盗作問題が資本主義という契機を抜きにしては考えられないということも意味していないだろうか。

〈評者〉 絳 秀実

(文芸評論家)